KSKS

花の会ニュース

２０２２年１０月号
no.194

編集人／ 社会福祉法人 花の会　広報委員会 連絡先／ 〒569-1042 高槻市南平台 3-29-9
TEL 072-692-2859　FAX 072-693-3603
★WEB　https://hananokai.info/　★E-mail　hana-net@minos.ocn.ne.jp

２０００年１２月１２日第三種郵便物承認　毎月（１・２・３・４・５・６・７・８の日）発行
発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町２－２　東興ビル４階　定価１００円

2023年の 花の会 オリジナルカレンダー を販売します

今年も、花の会のメンバーが描いた作品で、**花の会のオリジナルのカレンダー**を作成いたしました。

- スケジュールが書き込みやすい仕様です。
- 見開き（Ｂ３）の大きなカレンダーです。

１本　1,000円（税込）

送　料　１８０円（1本送付）
　　３００円（2本送付）
　　無　　料（3本以上）

カレンダーのご注文・お問い合わせは
共働舎花の会 までどうぞ。

電　話　：072-692-2859
ＦＡＸ　：072-693-3603
担当：大久保・鹿子

「シンクロ」するとは？

新聞で村瀬孝生という人を「シンクロと自由」（2022年7月、医学書院）の書評で知った。他に「認知症をつくっているのは誰なのか」（ＳＢ新書）という著書もある。どちらも、すぐに読める、読みやすい本であった。冒頭には「エビデンス重視の時代と逆行する本だと思います。けれど、よく分からないことに、分からぬまま付き合い続ける実践があってもよいと思うのです。」の魅力的な文句があった。

花の会では、メンバーに寄り添った支援や、メンバー個々の理解、今はエピソード記述の取り組みを行っている。日頃、話したり、文書に書いたりの中で、支援者はよく理解し、本人に沿った支援を考えていることが話され、書かれる。しかし、支援者にもいろいろあって、「あの人はこの仕事、向かないね」「センスがないんだね」とか、家族や同僚と話が交わされることがある。「センスがない」と言われると、取り付く島もない話だが、新任者であっても知識なしでクリアする人も、また、いるのである。そんな「センスのなさ」をクリアできるものと思い研修、話し合いをやっている。この状況は、支援者にとって切ないものだと日頃感じていて、何か言いようがないのかと感じていた。

高齢者への介護の世界は、身内の介護者を見ていても、ドライな世界だと思っていて、寄り添った介護として示される例は、人柄を持ち上げたり、すかしたり、という印象があった。でも、介護の世界でも、しっくりいかない現実があるだろうし、どのように感じているのか知りたいとも思っていた。

児童や障害の分野で「接面」と言われる、お互いが感じ取りあう一瞬の場面の大切さが言われています。それが、介護の世界での高齢者と介護者が「シンクロ」する場面があるんだよ、そして「チューニング」するんだよ、という内容にハッとさせられた。漠然と、わかったような気でいても、やっぱり直接の場でのやり取りが、全てを決めるんだと感じた。

障害、「認知症」と言われる、支援者（健常者）が知らない世界の人と関わることの「楽しさ」や「自分を感じる」ことのつながりを、大切に考えていきたい。

（やまだのかかし）

日原 克仁さんを偲んで　追 悼 インタビュー

日原 克仁さんのプロフィール

1972年１月生まれ。出産時に障害があり、小児脳性麻痺の診断を受ける。３歳10か月で歩き始める。４歳頃に高槻に引っ越し、高槻市内の療育園に行き、養護幼稚園に通う。地域の小学校、中学校に通う。養護学校を卒業後、市の通所施設を利用する。1995年に「らいぶりい花の会」に通所。1998年からフラワーホームに入居。

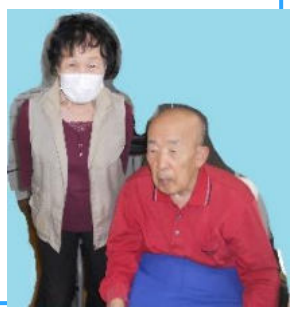
2022年８月逝去。

ご家族のプロフィール

共働舎花の会、フラワーホーム「ぽん」を利用されていた日原克仁さんのご両親。

克仁さんが小学生の頃に学校の先生の紹介で花の会賛助会に入会し、活動に協力くださる。

活動を通して統合教育やプール実習、ヘルパー利用など障害福祉サービスに繋げる礎を築いてくださる。



Q どのような幼少期を過ごされていましたか？

母：１歳の時に大阪市内で歩いたりプールに一緒に入ったりして身体的な訓練をしていた。訓練に行ってても楽しかったもんね。

Q お母さん同士の繋がりもあったんですか？

父母：来てもかーくん背負って大阪まで行ってたんよね。だからいまだにお付き合いがあるの。３歳頃に歩けるようになったの。当時の小学校の入学条件が歩けることだった。階段上がれますかって言われて、教育委員会へ行って、学校へ行くのに歩かれへんかったら勉強できへんってどういうことやって言いに行った。それでも、淀川の堤防で歩く訓練をした。（堤防を駆け上る克仁さんの写真を見て）これ、訓練ね。それで歩けるようになった。階段も上り下りできていた。うちの子が小学校に入学してから、高槻市内の小学校は障害児を受け入れ始めた。地元の小学校だけが受け入れていた時期は、遠方の小学校区からも通ってくる子がいた。

小学校の時は、地域の野球チームに入っていた。運動会では組体操をしたり、騎馬戦にも参加した。今では組体操なんかしてないもんね。補助輪付きだけれど自転車にも乗っていた。建て替え前の自宅は４階にあったので、階段でも自分で上り下りできていた。療育教室では、端から端まで走ったりしていた。

泳げるのに中学に入ってプールに入れてもらえなかった（克仁さんが飛び込んだり、泳いでいる写真を見せて説明していただいた）。対策はないのか聞いたが、ないと言われ、通っていた療育施設に相談すると救命胴衣を着るといいと言われ、持って行っていいと貸してくれた。それを学校に提案したら、これが発端で皆がプールに入れるようになった。

Q花の会のメンバーも浮き輪や救命胴衣みたいなのを着てプールに入っている人もいますね。

父：こういった試みもなかったことに対して怒ったった。飛び込みをしたり、ビート板を持って泳いでいたけれど、練習してビート板も持たずに泳げていた。一度入ったら出て来なくてね。

Q水が好きだったのかな、お風呂も出て来ないですもんね。

母：風呂も好きやったしね。友達がいつも一緒にね。かーくん、かーくんって言ってね。

Q周りにいつも誰かがいますよね。

父母：みんなに教えてもらいながら、できることが増えていった。言葉も教えてもらって、単語とか少しくらい言えていたんやけどね。養護学校に行ったら皆しゃべらないからね。

Q小学校の時は話せていたんですか？

父母：小学校、中学校では皆教えてくれるでしょう。「おはよう」って挨拶すると「おっ、おっ」って言ったり「葉っぱ」とか「しー、しー（トイレ）」も言ってたし、いろいろ言ってたね。家に帰ってきたら「ご、ご、ご」って言ったりね。女の子がいつも付いてくれてね、帰って来る時に「んっ、んっ、んっ」って言うから声が聞こえるねんね。家にいても帰って来たわってわかってね。そこの空き地の向こうに自動販売機があって、そこに 100 円持って買いに行ってた。よく行ってね、地面を見てんねん。そしたらね、お金を落として探してんねん。何でもさせなあかんで。

Q自動販売機の買い方は教えたんですか？

父母：教えへんよ。１回は行ったかもしれんね。それで頂戴って言うからね。そういうことをかーくんはして来たんよね。

母：（小学校の）１，２年の時は教室の片隅で縛られていたとお友達が教えてくれていた。３年生の時

に担任の先生が変わって、初めは、かーくん（克仁さん）を触ったり、よだれを流すので汚いと言われていたけれど、クラスの子も慣れてきたのか、自分の食べていたものをかーくんにあげたり、かーくんが食べていたものを食べたりするようになってきた。

学校の送り迎えも頼まなくてもみんなでしてくれてね。誕生日会をしてみんなを呼んだりしてね。

小学生の時はクラス全員、お兄ちゃんの友達も含めて宝塚、枚方、須磨浦公園にプールやあちこち皆で一緒に魚釣りや貝拾いに（お父さんとお母さんが連れて）行ってね。私もあの頃は若かったからね。

お父さんの友達と会社の保養所があるので、毎年琵琶湖に旅行に行っていた。なばなの里とかね。高槻市の親の会でも篠山に毎年泊りに行っていた。

いまだに会ったら友達も声をかけてくれた。ずっと手紙のやり取りをしていた女の子で結婚して遠方に引っ越しても会いたい、会いたいって言ってくれていてお葬式にも来てくれた。

中学に行くと塾に行かずにかーくん送って、親

に怒られたこともあったけど。学校の先生も朝に迎えてきてくれて。その先生も去年、かーくんに会いに来てくれはってん。先生も涙流してね。かーくんに会えたって、うれしかったって言ってね。

思い出の記録

後　記

お話を伺って、日原克仁さんの周りにはご両親だけでなく、同級生やいろいろな人たちが常にいました。ご両親からのお話を聞いて、日原さんが沢山の人に慕われていたのがわかりました。今のワーカー、世話人には想像もつかないような日原さんのエピソードを沢山ご両親から聞かせてもらいました。できないだろうからとさせないでいると、その人の可能性を摘んでしまいます。いろいろ挑戦して、できることを増やしていくことで可能性が広がること、サービスや支援がないからと言って嘆くのではなく、実績を重ねて制度や新たな支援に繋げていくことも、我々の職務だと思いました。中学生になってからてんかん発作を発症したこと、発作によって、心肺停止状態になって復活したことや、一人暮らしが目標だったことなど、まだまだ日原さんにまつわるお話はあります。日原さんと関わって楽しかった思い出は沢山ありますが、日原さんを通して得た知識や経験を後世にも伝えていきます。

日原さん、ありがとうございました。

（フラワーホーム　徳野　裕季）

日原　克仁　さんへ

フラワーホーム　「ぽん」世話人　川畑　智亮

日原さんの突然のご逝去の報をホームで受け、驚きそして残念でなりませんでした。

日原さんとは、世話人としてホームに配属される前、日中で実習を行った時にお会いすることになりました。その際に「はじめまして」と声を掛けた時には少し緊張なさっていたご様子が見られましたが、一日の仕事を終える頃にはこちらににこりと笑顔を向けてくださり、何だかホッとしたことを今でも思い出します。それから一年半ほど経って「フラワーホーム」に配属が決定し、前任の世話人からの引継ぎがあって、一人で勤務することになり若干不安を感じていた時に、見覚えのあった日原さんと再会しました。時には転倒させてしまったり熱中症に気付けなかったりといった失敗を繰り返しましたが、日原さんのご家族とも交流を重ねていく中で、だんだんとこちらが歩幅を合わせて心を通わせることができたと思いました。日原さんが共働舎花の会で倒れられたと聞いて、居てもたってもいられず、焦燥感ばかりが募ったこと、意識を回復されてお顔を見ることができた時にやっと安堵できたことなど、今でも思い出します。

「フラワーホーム」から生活の補助にヘルパーの方が来てくださるようになり、「ぽん」へ移られてからは、水谷世話人が企画したクリスマスや節分などのイベントにも参加され、日原さんのことを真剣に支援し続けてくださった染矢さんや、専門的な知識で助けてくれた黒川さん、その他様々な世話人との人間関係の広がりが日原さんの生前の暮らしを彩っていたことと思います。

最後に日原さんが安らかにお眠りになれるよう心からお祈りいたします。

日原　克仁さんを偲んで

共働舎花の会　志井　孝之

2022 年８月７日、日原克仁さんが亡くなられました。

昨年度末に「体調不良で緊急入院された」とグループホームより連絡がありました。通常であれば、病院の方に伺い、ご本人の状況の把握やフォローアップ、調整等を行うのですが、コロナウイルス感染が猛威を振るっているため、お見舞いに伺うことができず、回復して通所が再開できることを祈る日々が続きました。病院、ご家族と回復後の退院について話し合いを行いましたが、受け入れ態勢が整わないまま、転院されることになりました。

そして、コロナ感染収束の兆しが見られ「短時間の面会が可能になるかもしれない」と聞いていた矢先に訃報が届きました。以前にも大きなけがや病気で入院されていたことがありましたが、その度に元気になって帰って来られていたので、私自身その事実を受け入れられませんでした。

日原さんとの関わりは、私が共働舎花の会に異動してから約 15 年になります。そのうち数年は、担当ワーカーもさせていただきました。日々の活動の中で思い出されるのは、ランチタイムでの日原さんの様子です。昨年度、共働舎花の会でもグループホームでも、ごはんを準備しても手で「要らない」と拒否されることが続きました。栄養士と相談し、好物の麺類やパンを用意する中で、少しずつ食べられる物が増えていき、徐々に食欲が回復していきました。普段通りの食事が摂れるようになった時は、とても嬉しく思いました。

室内でアルミ缶のプルタブ入れや紙漉きなどの作業をすることが多かった日原さんでしたが、近くを通るワーカーの身体にそっと触れ、驚く仕草を見て豪快に笑ったり、「志井さんが来たよ」と声をかけられ驚きの表情を浮かべたりと、皆から愛される存在であり、温かい気持ちをもらっていました。もう一度、一緒に共働舎花の会で活動をしたかったです。残念でなりません。共働舎花の会のメンバー、ワーカー一同、心よりご冥福をお祈りいたします。

-------- ♥ -------- ♥ --------

共働舎花の会にて、2022 年 10 月 20 日に日原さんを偲ぶ会を開催。

メンバー・ワーカー・世話人が献花し、手を合わせました。

「ひらかた　くすの木」新施設竣工

「ひらかた　くすの木」がスタートして２年半。メンバー・家族の方々が期待に胸を膨らまされていた新しい事業所が、去る９月 30 日に竣工しました。

予定より半年遅れの４月から始まった建設工事着手。始まってみればあっという間の６か月が過ぎ、台風やコロナの影響もほとんどなく、予定通り工事が完了（竣工）しました。

また、10 月 12 日（水）の竣工式には、枚方市担当課職員様、校区福祉委員会等の地域の皆様、設計会社様、工事関係者様、理事、評議員の方々にご参加いただき、無事終えることができました。この場をお借りいたしまして、関係者の皆様にお礼申し上げます。

いよいよ、11 月１日（火）より、新築された「ひらかた　くすの木」での活動が始まります。メンバーの皆さんにおいては、戸惑いなどあるかもしれませんが、新たな授産活動も取り入れましたので、気持ち新たにスタートさせていきたいと思います。

（ひらかた くすの木　田中　弘樹）

お父さんも考えています

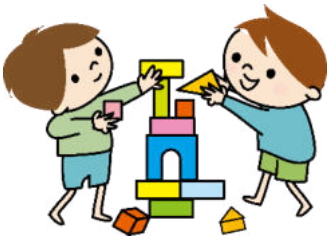
中山　祐司さん
児童のお父さん

中山　祐司さんのプロフィール

小学５年生と中学１年生の二児の父。高槻生まれで、小・中・高校までは高槻の学校に通っておられ、現在は民間バス会社でバスの運転手をされています。子どもが小学校入学時には、子どもが通う学校のことを知ろうとPTA 会長になられるなど、積極的に関わっておられます。趣味は釣りで、子どもたちとも釣りに行っているそうです。

Q 児童発達支援や放課後等デイサービスの事業所を利用することを考えた、思いやきっかけは、どんなことですか？

父：様々な経験をするのは必要で良いことと思っていて、家ではできない経験、例えば友達作りや人との付き合い方（弱い人や強い人の接し方、小さい人の接し方など）、人を見る大切さを経験させたいと思いました。また、ルールや集団の中でも落ち着いて過ごせるようになってくれればと考えました。



Q 花の会の児童発達支援・放課後デイサービスを利用してみて感じたことはありますか？

父：妻の時間を確保することができ、例えば、家事をこなす時間が増えたり、妻の気持ちが出せる（聞いてくれる）場所となりました。自分の仕事が不規則なため、妻への負担も多かったと思うので、その負担が少しは減ったのではないかと思っています。また、子どもたちも楽しんで通っていて、楽しい場所なんだと感じました。

Q 学校との関わりは、どのようにされていますか？

父：娘の小学校入学時に、子どもが通う学校のことをもっと知ろうと思い、PTA 会長を引き受けました。その結果、学校のことを知ることができて理解も深まり、引き受けて良かったと思っています。また保護者の知り合いも増え、子どもの友達にも自分のことを覚えてもらうことができ、見かけたら声を掛け合うこともあります。学校は、子どもにとって大切な場所であり、親としても大切な場所だと思います。

Q 保護者同士でのつながりの中で、何か印象に残っていることはありますか？

父：同じ学校の放課後等デイサービスを利用している親から言われたことで、印象に残っていることがあって、「放課後デイサービスへ通うことは修行に行っている、心を育てるため」と言われ、この話を聞き、親として多少の葛藤があったが心が救われ、安心して、通わせられると思いました。

Q お父さんが思う理想の家庭像とかはありますか？

父：みんなが笑っている家庭です。怒っている声が外にこぼれるのではなく、笑い声が外に聞こえるような家庭。まだまだ頑張っている途中です。

Q子どもさんとの接し方で気を付けていることは、どんなところですか？

父：息子には男同士友達の感覚で、娘とは彼女のようなスタンスで接しています。スキンシップを大事にしていて一緒に寝たり料理を作ったり、出かけたり、遊ぶようにしています。子どもと一緒に遊ぶことが大切。また話を聞く姿勢でコミュニケーションをとり、子どもがいろんなことを言いやすい、しゃべりやすいようにと思っています。アドバイスは伝えるが自分で考えさせるようにしていて、１つ１つ解決していきステップアップしていければ、それが成長だと思っています。できないことがあればできるまで待つようにして、良かった所は褒め、期待を持たせてあげたいです。基本は、「経験させる・隠し事をしない・優先順位を考える・相手の思いを推し量る・親の意見を押し付けない」などを考えながら接しています。

Q思い出を記録しているとお聞きしましたが？

父：２年前から子どもの出来事を手帳に記録をつけています。時々、見返し思い出を振り返ることもあり、子どもが将来大きくなった時に昔はこんなことあったんだと伝えたいと思っています。孫ができた時に、爺ちゃん（現：父）、親（現：子）の話ができたら嬉しいなと。

「父と子のやりとり」

エピソード ①

好きな子がいるから誕生日プレゼントを買うと教えてくれたことがあり、何を買うのか聞くと、相手の子はお菓子が好きと言っていたので、「お菓子を買う」ということだった。お金のこと（自分のお小遣いで足りるか）を心配していたが、父は「プレゼントだけじゃなくて、ケーキも買って持って行ってあげろ」とアドバイス。お金（ケーキ代）は父が出すと伝え、プレゼントとケーキを持って行き、相手の子は喜んでいたとのことでした。

その後「食べ物は食べたらなくなるから、ハンカチとか残るものを渡したら、それをその後使ってくれているかで相手の気持ちも確認できるんちゃうか？」と更なるアドバイスを行ったそうです（笑）

日頃から子どもとは、恋愛の話などよくしているそうです。

エピソード ②

子どもと喧嘩することやうまくいかないこともよくあるそうですが、その時、子どもには、「自分らより何十年か長く生きてきていろいろ経験しているから、いろいろなことを言うけど、親としてはまだ十年ちょっとの新米なんで、分からないこともある。自分らと一緒に成長していくんやぞ」と伝えたことがあるそうです。親としてのプライドや意地を張らず子どもと一緒に成長していく姿勢を見せることで、共感を得られたそうです。

後記：中山さんと自分は偶然年齢が同じだったので今回どんな話を聞けるのか楽しみでした。話を聞いていく中で、子どもに寄り添った考えや行動をされているのがとても伝わり、お母さんとは違ったお父さんの役割の大切さを感じる勉強になる時間でした。　（山口　昌亮）

（取材：あじさいクラブ　中川　朱美
あさがおクラブ　山口　昌亮）

職員の声・支援への思い

古園　芳樹さん
高槻市障がい者就業・生活支援センター　就業支援担当

古園 芳樹さんのプロフィール

- 入職６年目
- 最近の趣味は観葉植物の育成とカフェ巡り。おうちを観葉植物だらけにしたいとか。

- 高槻でお勧めカフェは、芥川の【テマヒマ】。

職員へのインタビュー、第４回目となる今回は、障がい者就業・生活支援センター（就ポツ）で就労支援されている古園さんにお話をお聞きしました。

Q 花の会入職のきっかけを教えてください。

古園：元々は地元の児童養護施設で３年働いていました。その時、卒業した子どもたちの就職支援が全然ないなって感じてたんです。実際半年くらいで辞めちゃう子も結構いて…。そういう、施設を卒業した子たちに対する支援がしたいなっていう気持ちはずっとあったんです。

児童養護施設には、発達障害や知的障害のある子どもたちも多くいました。でも、当時の自分はその子たちの障害や特性についても、感覚では分かっていても説明はできなかったし、ASD の診断が出ていた子もいたんですけど、当時の自分は「何それ？」っていう感じで…そこを知らないとその後の支援もできないな、っていうのも感じていました。

だから、障害福祉の勉強をして、支援の幅を広げたいなと思ったんです。そういう福祉系の資格を取ったら、その先の仕事にも繋がるんじゃないかなと思って、大阪の福祉系の専門学校に１年通いました。そこで、在学中に専門学校の先生から「就ポツっていうのがあるよ」って教えてもらったんですよね。で、就ポツの求人を片っ端から探していったら、たまたま高槻就ポツの求人が出ていて…っていう流れで今に至ります。

Q 就ポツの仕事について教えてください。

古園：これから障害者雇用での仕事を目指したり、その訓練や練習をしたい、という方の最初の窓口が就ポツです。「職場でどうやったら仕事がうまくできるのか」という相談ができたり、障害者雇用やそれに関係する支援の情報を伝える所、ですね。

Q 仕事をしていて、どんな時に楽しいと感じますか？

古園：正直、今は楽しさが薄れているかもしれません…。

入職当初は分からないことだらけで、逆に登録者の人から教えてもらうことも多かったんです。担当している登録者の方と話す中で、その人の気持ちや受け取り方が分かったり、本人の職場に行って、企業の方に話を聞く中で、本人について今まで知らなかったことが分かるようになったり…さらにそれが他のケースにも応用できたりする経験が楽しかったかな、と思います。

知らなかったことをいっぱい吸収して、知識や経験を使って支援する楽しさ、というか…、その部分で、今はちょっと、何ていうか慣れみたいなものが出てきているのかもしれないです。

次のステップというか、新しい「仕事に対する楽

しみ」みたいなものを見つけていかないとな～、と思っている所ですね。

Q 就ポツは最近新体制になったと伺っています。その中で、自身の役割はどんなものだと考えていますか？

古園：ほんとに自分は今、中途半端な立ち位置ですよ…(笑)。職歴的には、上から３番目ですね。今まで経験して得た知識を後から入って来られた職員さんに伝えていきたいな、と思います。

一方、社会人歴でいうと、自分の方が全然浅いので、そういう面では教えてもらうこともたくさんあります。なので、先輩にとっても、後輩とっても、「(意見や相談を)言えるし言われる」、みたいな中間的な立場が自分の役割、ですかね。

自分みたいなやつがいることで、部署内全体で意見交換がしやすくなったらいいな…というか、そういう役割になれたらいいなと思っています。

Q 仕事をしていて、苦労したな、と思うことはありますか？

古園：最初の方は全部ですね…。１時間ある面談の時間の使い方とか、登録者さんの対応も…外部の企業対応も全然やったこともなかったし、基本的なビジネスマナーとかも全然ダメでした。セミナーや啓発イベントの発表とか司会とか、グループワークのファシリテーターとかも、最初は苦手でしたね。

１年目の自分を見てた先輩や上司は、心配だったと思いますよ。

でも、「分からないことばっかりで嫌だな…」で終わるんじゃなくて、それを改善するためにいろいろ試したり勉強できたことは楽しかったです。さっきの質問にあった、「仕事で楽しいと思うこと」にもつながるんですけど、知らないことや分からないことを学んでいくことが好きなのかもしれません。知らないことが多すぎて、新しく覚えることばっかりだったから楽しめたのかな。

そういう部分で、今楽しめていない所が、今の苦労してるところかなと思います

Q 支援で大切にしていることを教えてください。

古園：「本人の意思決定が大事」って、とても基本的なことだと思うんですけど、本人が「自分にはこういう選択肢がある」ということを知らないと、そもそも意思決定できないと思うんです。そういう情報や選択肢を、本人に伝わる言葉や方法で伝えていくことを大切にしたいです。

だからこそ、自分たちは福祉のことだけではなく、いろんな情報を知っておかないといけない。その上で本人の意思決定をサポートしていけるような、福祉専門職になりたいと思います。

Q 今後の目標はありますか？

古園：地域とのつながりや関わりを、もっと自分で作っていきたいなと思っています。地域の福祉事業所に出向いて、自分から情報収集していきたいし、自分や就ポツの情報発信もしていきたい。

例えば地域の中で何か困ったことや分からないことがあったら、「古園に聞いたらなんか出てくるんちゃう？」みたいに思ってもらえるような人材になっていくのが今後の目標ですね。

後記

仕事に対する正直な思いは、古園さんが真剣に仕事に向き合っているからこそ感じるものなのだと思います。次の課題を見つけられていないことが課題だとおっしゃる古園さんでしたが、こうなりたいという目標があり、それに向かって進んでいる姿は、自分にとっても良い刺激になりました。

（取材：田淵　彩子）

児童通所支援の報告

～　夏休みの思い出　～

今年も去年同様のコロナ禍での夏休みでしたが、今年はコロナに負けず、去年できなかった「調理実習」や「おでかけ」など、各事業所で企画を考え工夫しながら実施しました。例えば調理実習では、子どもたちが野菜を切ったり炒めたりして、美味しいカレーを作りました。また、川に行って水遊びやカニやエビ、魚を捕まえたり、事業所の中でかき氷や綿あめ、当て物や輪投げなどのお店を出し夏祭りを開催したり、車に乗って少し遠くの施設や公園へ（ダスキンミュージアムや五月山公園など）出かけるなどして、様々な体験をすることで、新たな経験や楽しい夏の思い出を作ることができたのではないかと思っています。そして一番は、子どもたちの笑顔をいっぱい見ることができ、とても嬉しく、また一緒に楽しませていただきました。本当に今年はここに書ききれないほど、いろんな所へ出かけたり、遊んだりして、「今日は何するの？」「どこ行くの？」といった感じの毎日でした。（笑）

（あさがおクラブ：山口　昌亮）

～ 桃園ギャラリーで、合同作品展を開催しました ～

９月２８日（木）から１０月１２日（水）の２週間、高槻市役所総合センター１Ｆエントランスにて、あじさいクラブ・さくらクラブ・あさがおクラブの児童部門３事業所による合同作品展を開催しました。

全体の作品のテーマを『秋』とし、各事業所で職員とメンバーが相談し、どのような作品を作るかを考えました。今回、初めて児童部門が単独で開催する展示会ということで、不安もありましたが、子どもたちは時には職員では考えつかないような発想をもってアイデアを生み出し、自ら中心となって立体模型や壁画などを次々に制作してくれました。夏休みのご利用時間中に少しずつ作り、２か月の制作期間を経て完成となりました。『秋』のテーマを各クラブで解釈し、作品として仕上げましたが、それぞれの個性が出ているように思いました。

最後に、制作において、ご協力いただいたご家族の皆様、また合同作品展に足を運んでいただいたご利用者、ご家族の皆様、市役所を訪れ作品を見ていただいた皆様、誠にありがとうございました。ぜひご感想をお聞きできればと思います。次回の開催は未定ですが、第２回があれば今回の反省点も生かし、より良い作品展の企画ができればと思います。

（あじさいクラブ　石橋　洋平）

就労相談支援の報告

ワーたんぽぽ

～ 芥川小学校の夏祭りに参加しました ～

ワークたんぽぽに異動になり３年目となりました。ようやくイベント出店にも慣れてきましたが、ワークたんぽぽのイベント出店主力事業「天神祭り」「高槻ジャズストリート」「芥川小学校夏祭り」「たかつき食の文化祭」のうち２事業が、２年間コロナ渦のため開催されませんでした。「天神祭り」は何度か応援で経験し段取りや要領は分かっていましたが、夏祭りは今年初めての参加となりました。メンバー有志とワーカーで、くじ引きとひかりものすくいを出店しました。

当日の天気は夕方から大雨の予報。あまりお客さんは来ないものと高をくくっていましたが、実際に開催されると、予想以上の大盛況ぶりでした。

前日、メンバーより“最後尾”のプラカードを作って欲しいと要望があり簡易なものを作りましたが、お客さんが多すぎて行列の長さは３０ｍを超え、雨も降り出したためプラカードは瞬く間に傘の中に紛れてしまいました。

雨の中頑張ってくれたメンバーに謝り、来年は立派なプラカードを作ることを約束し、来年こそは、すべてのイベントが開催され、工賃がアップできるよう取り組んでいきたいと思いました。

（ワークたんぽぽ　中田　秀紀）

フォルツァ

オンラインしごと体験に参加

就業・生活支援センター（以下”就ポツ”に略）で開催されたオンラインしごと体験に参加した。約１時間程度の体験だった。講師のエンカレッジ窪さんから概要説明・アンケート、サンプルの実施についてご説明いただいた。

フォルツァのメンバーの他、就ポツ・三島地域若者サポートステーション（サポステ）の利用者が参加されていた。実際に企業で行われている仕事を体験できるサンプルなのだが、どの参加者も別のサンプルを選ばれたようだ。興味を抱くのが人それぞれ異なるというのが印象的で、個性が出て面白いと感じた。

フォルツァのメンバーは、電話対応、営業経費の入力を実施された。その他にも興味深いサンプル名がたくさんあった。参加者からは「（自分が）思っているよりもできたのでよかった」、「30 分程度の体験なので、もう少し体験したい」、「ミスをして悔しかった」という声が上がった。

今回の参加で、仕事の具体的な想像がつくきっかけになったと思う。今後の就職活動の参考にしていきたい。

（就労支援センターフォルツァ
田中　保千代）

法人の報告

理　事　会　の　報　告

９月に理事会がありました。まだまだ新型コロナウイルス感染症の拡大の恐れがあったため、実際に集まるのではなく、決議の省略という役員から書面で同意を得る形で開催しました。

議案としては、制度変更に伴って２月から対象職員に支給していた臨時手当を 10 月からベースアップ手当として支給するため、給与規程を変更する議案と、グループホームを建設するため国と事前協議を行う議案について、承認をいただきました。グループホームについては、まだ案の段階ですが、２棟３ホーム（男性４名、女性４名×２、避難スペース、短期入所）を計画しています。

メンバーの地域生活を守り、暮らしやすいものとするため、必要な事業を順次進めてまいります。

コロナや物価高で財政状況が厳しくなる中、高槻市から社会福祉法人特別応援金として 40 万円、大阪府からガソリン代高騰に伴う補助金を受けることができました。感謝申し上げます。

（業務執行理事　成瀬　修）

「総合支援法見直し」など、気になる動き

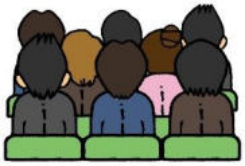
10 月 14 日「支援法」の改正案が閣議決定された。国会の審議は報道されている状態なので、予断を許さない中で、推移を見守るほかない。国連障害者権利条約についても、８月に日本の審査についての報告が出されたが、十分には拡散していません。

ニュースなどで、グループホーム（GH）の再編案について、関西を中心とする反対署名活動、厚生労働省との意見交換など、伝えてきました。

結果として、GH の追加類型として「通過型 GH」が取り上げられることとなっています。当初の大きな再編には至りませんでしたが、注視していく必要があります。

関連して、大阪市内の民間マンションを利用する GH が、管理組合から退去の訴訟を起こされて、控訴審まで進んでいることが大きな問題となっています。長く暮らしてきたマンションを今頃になって追い出すような訴訟と、１審のマンション側の勝訴。まだまだ、コンフリクトの火種とされる GH や事業所の開設に、暗雲をもたらすもの、障害者差別を助長するもの、身近に迫る危機感を感じざるを得ません。

話は変わって、文部科学省が４月 27 日に障害児学級の利用に関する通知をめぐって、大きな問題となっています。府内の地域では反対の集会や説明会などが開催され、実態と合わない国の通知と、来年度から「それに従う」という市町村。学校での時間の半分以上を支援学級で過ごすこと、という児童や保護者には理解の域を出た対応を求められようとしています。



高槻市でも多くの課題があり、地域の方々と共に取り組みを強化し、皆様にもお知らせしていきます。身近な、課題についても共に考えていきたいので、よろしくお願いします。

追悼したいこと。無認可時代から協力してもらっていた隣の市のスタッフが、64 歳で療養の甲斐なく永眠されました。地域の運動を根底で支えた方が亡くなるのは、同志を失う寂しさが残ります。合掌。

（理事長　山田　義昭）

２０００年１２月１２日第三種郵便物承認　毎月（１・２・３・４・５・６・７・８の日）発行
発行人　関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町２・２　東興ビル４階　定価１００円